

# 地方に暮らして世界を視る ～モンゴルとの国際交流～



講師：兵庫県但東町  
日本・モンゴル民族博物館  
館長 金津 匡伸

## 民間企業から外務省への転職、 にわか外交官の誕生

みなさん初めまして。私は、兵庫県の北部に位置する但東という町で、日本・モンゴル民族博物館の館長をしている金津と申します。今日は、パンテックユニオンさんがこれまで若い方たちを中心にモンゴルへの支援活動を続けているという関係から、あまり知られていないモンゴルの現状、または但東町が進めている国際交流について、ご紹介したいと思います。

まず、私がなぜモンゴルと関わるようになったのか、この点から話を始めましょう。プロフィールにもある通り、私は宮城県石巻市で生まれました。その後、青森県八戸の大学で建築工学を学び大手の住宅会社に就職しました。この会社では主に住宅の設計や工程管理などを担当していましたが、業界に住宅不況の波が押し寄せ、親類の紹介もあったことから大手警備会社に転職をしました。この会社では、主に機械警備のシステム作りの企画を担当していました。さまざまなプロジェクトをこなすうちに、東京サミットの警備を手がけることになりました。その後、警備関係のプロを求めている外務省から声をかけていただき、警備会社を退社して外務省へ転職することになりました。そして最初の赴任先となったのがモンゴルであり、「にわか外交官」の誕生です。考えてみると、いまま

で家族でモンゴルに赴任するなんて想像したこともなく、ここから私たち家族とモンゴルとの長いお付き合いが始まるわけです。

## 中国難民？国境での強制連行

1991年の春、家族でモンゴルへ赴任したのですが、当時は日本とウランバートル間には飛行機が飛んでおらず、飛行機による入国経路は、東京～モスクワ～イルクーツク～ウランバートル、もしくは新潟～ハバロフスク～イルクーツク～ウランバートル。夏季（5～10月）のみ東京～北京～ウランバートルの3ルートがありました。

私たちは東京から北京を経由し、北京で生活物資を調達しながら国際列車の旅をすることになりました。客車は「軟臥」と呼ばれ日本ではA寝台に当たるもののようでした。4人一室の2段寝台のコンパートメントで、昼はグリーン車に当たる軟座として使用します。軟座は4人向い合わせのボックスタイプで広々としており、座席にはカバーがかけられ、正面脇には固定式の小さなテーブルがあります。荷物は出入り口上の棚（廊下の天井部分）と下段ベットの中に入れます。コンパートメントの中では、狭いながらも楽しい我が家といった感じです。考えてみれば、家族4人がこんなに狭い中に閉じ込め

られ、朝から晩までお互いの顔を見ながらゲームやトランプをしたり、馬鹿話をしたりというように、こういう時間の過ごし方を今まで経験したことがありませんでした。日本の感覚からいえば、とても無駄に思えるかもしれない時間が、私たち家族にとってはとても大事な時間を感じたものです。

翌日の昼前に中国側国境の二連に着きました。愛想の良い中国人検査官から簡単なパスポートコントロールを受け、その後中国とモンゴルのレール幅が違うことから、車両の台車交換作業が始まりました。日本では珍しい光景だったので、しばらくその作業を息子たちと見学していました。モンゴル側の国境ザミンウッドゥに着いたのは、午後3時を少し回っていたようです。ザミンウッドゥ駅周辺は赤い砂礫性の土地で、いわゆるゴビ砂漠と呼ばれるところです。砂漠と言っても、「月の砂漠」のイメージではなく、比較的灌木類が繁茂している草原のような個所がありやや驚きでした。すでに周囲の景色や人物の服装からも、中国とは明らかに違う国にいるのだということは、好むと好まざるとにかかわらず感じ取ることができました。

しばらくしてから中国側同様にパスポートコントロールのため、数名の検査官が車内にやってきました。軍服を身につけた中年太りの女性検査官を先頭に、若い国境警備兵を従えて私たちのパスポートと入国カードの提出を求め、そ



草原を進むシベリア鉄道

のまま駅のホームに消えて行きました。初めて対面したモンゴル人は表情に乏しく、何か親しめない雰囲気でした。30分後、また検査官が現れ、今度は厳しい口調のモンゴル語でまくし立ててきますが、私たちにはまったくモンゴル語が理解できませんでした。このとき初めてモンゴル語とロシア語しか通じないことを知り、どちらもできない私たちにとっては急に恐ろしい状況にあることを知りました。まもなくしてモンゴル国境警備兵が現れ、突然ロシア製の銃を突きつけて両腕を掴まえられながら駅構内の建物に連行されて行きました。あまりにも突然の出来事で、子どもたちは驚いて泣き叫んでいますし、このままゴビ砂漠に埋められてしまうのではないかという殺気さえ感じました。建物の奥の部屋に連れて行かれると、先ほどの中年女性とその上官らしい人物が椅子に腰を下ろしています。目が合うなり、目の前の木製椅子に無理やり座らされ、モンゴル語で何やら質問してくるのですが何一つ解することができませんでした。後ろには二人の銃を構えた警備兵が待ち構えており、生きた心地がしません。ウランバートルとやり取りをしている様子で、取調べを受けている2時間が何日分の時間にも思えました。結局、前日にモンゴルのビザが切れていたことを知らずに入国してしまった不法入国の嫌疑でしたが、モンゴル外務省と日本大使館の計らいで無事に解放してもらうことができました。一時はどうなるものやらと冷や汗もので、妻や息子たちの顔が去来し始めた頃には本当に駄目なのではないかと真面目に考えてしまいました。

取調室のある建物を出て、妻や息子たちのいるコンパートメントに戻ろうとホームを歩いていたら、国際列車の窓やデッキから大勢のモンゴル人乗客が無事に解放されたことを喜んで手を振ってくれたり、拍手をして温かく迎えてくれているのではないですか。これが先ほどまで取り調べをしていたモンゴル人と同じ民族なのだろうかと思議でした。腹立たしいやら、嬉し

いやらで、モンゴル国境で味わった天国と地獄です。コンパートメントに戻ると、真っ赤な目をした息子と、覚悟を決めたような妻とがびっくりしたような顔でこちらを見つめています。隣のコンパートメントにいたモンゴル人が、しきりに良かったと上手な英語で話しかけてきます。そのモンゴル人曰く、そんな格好では検査官も中国難民とでも思ったのではないかと笑って忠告してくれました。それもそのはずで、下が裸足に革靴をはいてジャージをはき、上はワイシャツ姿に髪は茫々といった調子で、見るからに難民の姿ではないかと話してくれました。彼は以前に一度だけ日本に行ったことがあるらしく、うやうやしくパスポートに記載されている日本のビザを見せてくれました。これよりウランバートルに着くまで、置き引きから荷物を守ってくれたり、息子たちと遊んでくれたり、初めて優しくしてもらったモンゴル人でした。ウランバートル在任中、何かとお世話になり、かといって突然現れては突然いなくなるという不思議な人物です。通称でしょうが、彼の名前は「COG(コグ)」といいました。

北京を出発して万里の長城を越え、ひたすら草原を走りつづけ、モンゴルの首都ウランバートルに何とか無事に到着することができたのは北京を発つこと二泊三日43時間の長い長い国際列車の旅でした。ウランバートル駅には、日本の国旗を持った職場の同僚と、モンゴル人現地スタッフら十数名が温かく出迎えてくれました。モンゴルの国境で体験したことは、しばらくモンゴルに対する第一印象として心に深く刻まれました。

## 在留邦人のために東奔西走

勤務していた日本大使館を簡単に紹介すると、大使館の建物は古い学校宿舎を改造したもので、中央の通路を挟んで小さな部屋が並んでいます。大きく西側は大使の公邸、東半分は大

使館事務所として使われていました。裏側にはテニスコートよりも広い裏庭があり、温室・洗濯室・食料庫・ガレージ・発電装置が設置されています。事務所の玄関入口を入ると、すぐに私の部屋があり領事と在外公館警備を担当していました。勤務時間は任国に合せられることも多く、モンゴルでは朝8時30分から午後6時。昼休みは12時30分から午後2時30分までの2時間という長いランチタイムでした。おかげで大使館の横並びにあった国立中央博物館に毎日のように通うことができました。約1時間はたっぴりと見学しながらメモを取ることができ、但東町でモンゴル博物館を開館させるときの基礎勉強になりました。

大使館の勤務はかなり不規則で、いくら残業しても残業手当が支給されることはありません。

緊急事態があれば早朝だろうが深夜だろうが、すぐにかけて処理しなければなりません。小さな大使館ということもあり、一人で何役もこなさなくてはならず、主に領事と警備関係を担当していました。領事業務ではビザの発給・旅券発給・邦人援護など、警備関係では任国犯罪情報の収集・テロ対策・公館警備対策・保秘対策などの業務が担当です。それ以外にも庶務的な業務が多くあり、空港まで関係者の送迎、滞在期間中のアテンド、観光案内なども交替で対応していました。国内では馴染みのない仕事ばかりに戸惑うことも度々です。赴任当初はビザの発給もそう多くありませんでしたが、日に日に申請書が増えるようになり、日中は大半がビザに関する業務が占めました。申請書の確認、審査確認、本省への問合せ、発給、報告書作成という仕事が延々と続きました。また、パスポートを盗まれたりして、帰国できない日本人たちも多く、「帰国のための渡航書」発行も結構ありました。在留邦人の困りごと相談などもあり、比較的親身になって対応できたと思っています。最近では機密費問題で揺れる外務省ですので、どこの大使館も職員対応が悪いなど

とよく聞こえてきますが、全てがそうではありません。

## 食料調達も大切な業務、北京クーリエ

大使館員としての仕事にクーリエというものがあります。外交文書を本省や近隣公館に確実に届けることが目的で、月に1度か2度の割合で廻ってきます。簡単に言うと、外交文書を運んで行く海外出張のことです。モンゴルでクーリエと呼んでいたのは、北京、香港、それに東京の外務省を併せて3ヶ所が対象となっていました。外交文書の中には機密扱いのものも多く含まれることから、クーリエバッグは封ろうして各空港施設ではフリーパスで通ることができました。途中で問題が発生しないよう、英語・中国語・モンゴル語で安全に通過できるよう依頼した大使館からの文書が準備されています。

中国や香港クーリエでは、各空港で日本人派遣員が待機してくれており、安全に確実に入国できるよう配慮されています。そのまま、すぐに大使館や領事館に向かい、文書担当官に確認してもらい金庫に収納してその日は一段落です。北京クーリエは外交文書を届けるのと同時に、食料調達を兼ねており、3泊4日程度の日程です。現在のモンゴルは豊富な食料品が並んでおりますが、当時は明日食べる食料にも事欠いていた時期でもあり、家族で出かけられる北京クーリエはモンゴル滞在中の楽しみの一つでした。他の館員から依頼された買物もあり、食料調達と買物で丸一日潰れてしまいます。ゆっくりしたいと思いつつも適わないことでしたが、ホテルで食事できるだけで満足していたように思います。当時のウランバートル市内にはモンゴル料理かロシア料理しかなく、それも脂ぎった食事と羊肉の匂いで少々閉口していました。それだけに、メニューも豊富な中国料理や日本食も食べることができた北京は極楽に感じたものでした。

## ウランバートルでバースデーケーキ

ある年の夏に八戸市と仙台市に住む恩師と友人4人がウランバートルの我が家まで遊びに来てくれました。たまたま北京出張中だったので北京で合流してモンゴルへ。メンバーにウランバートルで誕生日を迎えた友人がいました。誕生日にはケーキがつきものですが、モンゴルにはケーキ屋なんぞあるわけがなく、すべて特別注文でレストランにお願いしなければなりません。小麦粉も砂糖もバターも、すべて配給制であり、朝一番に注文してもその日のうちに調達することはまず不可能なのです。片っ端から電話で確認していきましたが所詮ダメなものはダメで、最後の切り札として、モンゴル外務省内のレストランに聞いてもらうことにしました。ダメでもともとだったのであまり気にもしていなかったのですが、夕方の帰り際にウランバートルでは見たことがないデコレーションケーキを持って現地スタッフたちがニヤニヤと笑っているではありませんか。実に感謝です。スタッフから聞いた話では外務省の担当者に直接話して頼み込んでくれたそうです。かつて、このモンゴル外務省ご用達のケーキを食べることができたのは、モンゴル人民革命党の幹部か国家元首に近い人たちしか賞味できなかったという代物です。市内で一般的にみられるケーキは、15センチ前後の変形した楕円形で、情けないほどしかクリームが塗られていないのが普通なのです。今回のケーキは、40センチ角という破格の大きさ、それにバタークリームがたっぷり塗られ、その上に何色かのバラの花が置かれている豪華版です。日本のデパートで売られているものと全く遜色ないものでした。

さて、いよいよケーキを前にして、わが息子たちの「ハッピー・バースデー・ツーユー」の歌声とともに、ロウソクの火は吹き消され、ケーキに入刀。その瞬間、廻りにいた日本人全員の顔が一瞬歪んで見えました。それもそのは

ずで、ケーキに使ったバターから強烈な匂いがしていました。なかなか思うように口へ運べず、お互いの顔を見合わせているばかりです。どうもバターの種類が違うのか、確かに妙な味と匂いは間違いありません。日本人の目から見たら、ちっぼけな美味しくないケーキにしか見えなかったかもしれません。でも、このケーキを作るのに、何十人というモンゴルの人たちが動いてようやくできたという彼らの「心」そのものなのです。彼らの言葉を借りれば、わざわざ遠い日本からあなたの大切な恩師や友人が来たというのに、「黙って何もしなかったではあまりにも恥ずかしいではないか」と言うのです。モンゴルのことは、モンゴル人に任せなさい、それが流儀というもの。「人」と「人」の間には言葉が通じなくても、あたたかいもので結ばれていることを教えられた気がします。残念ながら、日本人の口にはとうとう入ることのなかったケーキを、モンゴルの友人たちが美味しそうに食べてくれたのが唯一の救いでした。

### 「日本の図鑑は間違っている」

初めてモンゴルの夏を経験した時のことです。子供たちが大使館の医務官に大草原への宿泊旅行に連れて行ってもらったのですが、草原に泊った長男が帰宅するなり、母親に向かって「お母さん、日本の図鑑は嘘ばかりだよ」と図鑑を持ってきました。何を言っているのか分からない妻に、星座の図鑑を取り出しながら「ほら、この天の川はこんなものじゃないよ。天の川って言うのはね、本当に水が流れているように星がいっぱいあるんだよ。日本の図鑑に描いてあるのはパラパラとしか星がないじゃない。」と説明していました。

子供たちと同行しなかった私には分かりませんが、一緒に行った同僚の話では「確かに日本の図鑑は間違っている」と話していました。考えてみれば、日本の夜空で見える星座なのだが



大自然を全身で感じる息子たち

ら、日本の図鑑はそのように印刷してあるだけで、本来、地球の何処からでも見えた星座ってというのは、子どもたちが見たものなのだろうと感心して聞いていました。ウランバートル周辺ではそれほどきれいだとは思いませんが、空気のきれいな地方に出かけると本当にきれいな天体観測が可能です。この大地を踏みしめながら、我が家の息子たちも大きくなってほしいと願ったのです。

### 大草原の秋の味覚「モウコシメジ」

モンゴルで日本人にも屋外で自由に手に入る食材がありました。モンゴルの大草原に食用キノコが生えていることをご存じでしょうか。夏から秋にかけて、各家庭の台所には糸でつながれた乾燥キノコがよくぶら下がっていました。知人の家でご馳走なった肉うどんの中にも乾燥キノコが入っていました。匂いと味は乾燥シイタケに似ており、結構美味しく食べることができました。

モンゴル人の伝統的な食物であるキノコは、日本人の口にも良く合います。しかし、こればかりはモンゴル人に連れて行ってもらわない限り、毒キノコばかりとってしまう結果になります。広大な草原を眺めていると、白い輪の形をしたものがみられますが、これがモウコシメジと呼ばれるキノコ群です。このシメジは草原の上に菌がで、毎年、そこから外側に向かっ

て育成場所を移していくため、白い輪はどんどん大きくなり、直径10数メートルにまでなります。モウコシメジそのものは10cm前後で、全体は白く表面は平滑です。時間が経過すると傘の表面に亀裂が生じてきます。モンゴルの人たちはこのモウコシメジをツァガ・ン・モーグ（白いキノコ）と呼んで珍重し、夏から秋にかけてキノコ狩を楽しむ人を草原のあちらこちらで見かけるようになります。ハル・モーグ（黒いキノコ）と呼ばれる食用キノコもありますが、モンゴルの人たちは一切食べません。モウコシメジは炒め物にしたり、そのまま焼いて醤油をかけて食べても結構美味しい。パスタや焼きそばに入れて頂くのもお奨めです。キノコの種類は日本と違出し、味も違いますが、日本人の好みからいっても上等な食物です。

### ジンギスカン鍋は日本生まれ？

次に「ジンギスカン鍋」というものをご存じでしょうか。この料理がモンゴル料理だと思っている人も多いようですが、これは日本人が発案した食べ方なのです。昭和10年前後に農林省が日本人の被服の原料を自給自足でまかなうために国策としてヒツジを100万頭に増やす計画を立てました。毛や皮は原料に使えますが、羊肉の処理に困り、食用に供されることになりま

した。北京の有名な料理長が呼ばれ、中華料理を参考にあみだされ、昭和10年以降から一般に広まったそうです。ヒツジを焼く料理が何故チンギス・ハーンと結び付いたかは明確ではありません。東京のジンギスカン荘という料理店が出されていたことから店の名前から来たのではないかと推察されます。特異な形をしたジンギスカン鍋はジンギスカン荘の社長が発案したことは知られているようです。もともとモンゴルでは肉そのものを焼いて食べるという風習がありませんので、まさに日本で生れた料理だということなのです。

### 「カナチは元気か？」がザハの合言葉

モンゴルにはザハという自由市場がありますが、たまたまザハで知り合ったドルジェという名のじいさんと仲良くなり、彼の家に何度も招待を受けました。家はウランバートルの西はずれにあり、移動しないゲルが無数に立ち並んでいる地区の一角です。お世辞にも清潔な地区とはいえない環境ですが、同じ場所から移ってきた人たちばかりで集落を形成しているようです。奥さんは彫りの深い顔で、カザフ族だと話していました。息子たちも青い目の西洋人という顔立ちをしています。

彼の家に遊びに行く度に子供たちへチョット



した土産を買っていくのですが、その度にあげるものがないからといっては古い木製椀や変な記念メダルをくれました。そのうち、ドルジェじいさんの近所では「金津は古い生活雑貨を集めているので協力してやってくれ」との噂が広まり、遊びに行くと近所の人たちが集まっては、得体の知れないものを持ち込むようになりました。まるでフリーマーケットのようでした。そのときにはアパートにあった子供たちが小さくて着れなくなった衣類や日本からコンテナで運んだ食料品などをお礼にあげていました。今度は自由市場ザハでも同様な噂が広まり、変な日本人が使わなくなった鍋や釜を買ってくれるぞと、ザハでは一躍有名人となりました。ザハはモンゴル人でもスリや喧嘩が多い物騒なところだというイメージがあるのですが、何故か一人でザハに行くと「カナチが来たぞ」といってはザハを取り仕切る人たちがスリなどから守ってくれました。おかげでモンゴル在勤中にスリなどの被害に遭ったことは一度もありませんでした。

私たちが帰国した後も、ザハで日本人を見つけると「カナチはどうしている、元気になっているか」と聞いてくるそうです。たまたま知人がモンゴルを訪問したとき、同じように「カナチはどうしている」と聞かれ「カナチ健在なり」と苦笑していました。今でも、この資料は誰から譲ってもらったものとか、1点1点に入手経過や聞き取りを記したノートが残っています。

### 「テイデン」、「ダンスイ」、「モツタイナイ」

ウランバートル市内には古い発電所が4基ありましたが、すでに古くて停止しているものもあり、十分に電力を供給できる状態ではありませんでした。室内暖房は9月15日から入りますが、発電所がうまく機能していないせいか、やや肌寒く感じることもありました。暖房は火力発電所からの余熱を利用して各アパートに配置されているパールと呼ばれるスチーム管につな

がっていました。それでも暖房だけは一度も切れることは経験しませんでした。地区によっては暖房が一時切れた場所もあり、深刻な電力不足が話題になっていました。

日本でもそうですが、停電になってしまうと何もできなくなります。台所の電気オープンが使えませんか、お湯を沸かすこともできません。娯楽としてのテレビもビデオも使えませんか、復電するまで家族で集まっては他愛のない話をしていただけでした。ローソクを囲むようにして、子供たちとふざけあっていました。停電のおかげで、逆に家族の絆は深まっていったのかも知れません。一番大変なのは食事を作る時間帯を狙っての停電が頻繁に発生し、思うように食事もとれない日もありました。モンゴルにはガスがないので、食事はすべて電気オープンでした。オープンの使い方によって食生活も大きく左右してしまいます。たまにアジの干物などを日本の土産として頂戴することもあり、オープンを使っただけのチョットした工夫が大切でした。でも、これも停電になってしまうと大事にしていた冷蔵庫の魚が腐ってしまったり、焼いている途中のまま生焼き状態になったり、停電の苦労は在勤中解消されることはありませんでした。これも老朽化した火力発電所が原因なのですが、大規模に改修するだけの予算もなく、ただ外国の援助に頼るしかありません。

頻繁に発生する停電のおかげで、当時1歳の息子が初めて覚えた日本語が「テイデン(停電)」でした。次に「ダンスイ(断水)」、そして「モツタイナイ(もったいない)」という言葉覚え、不憫な日本人の子どもがいると在留邦人の中で話題になっていました。

### 日本への緊急帰国

92年4月、体調を崩して日本へ緊急帰国しました。半月前から体調の変調を訴えて、勤務中または勤務終了後に医務官から点滴を打っても

らっていました。でも、なかなか疲れが取れず、日に日に疲労感が溜まるばかりです。緊急帰国は医務官が大使に進言し、私たち家族も納得したうえで緊急輸送を実行してもらいました。近い期日のフライトが中華航空だったので、至急座席を確保してもらい北京経由で帰国しました。北京からは全日空に協力してもらい、夜8時には成田空港に着く予定です。緊急輸送が決定してから、本省との連絡や航空会社との調整・折衝、受入れ病院の手配、関係機関への依頼、中国・モンゴルビザの取得、僅か一日で処理してくれました。

緊急輸送当日、朝早く大使館からの迎えの車が来てくれて、部屋からタンカに乗せられたまま空港へ直行。同僚や何人もの現地スタッフたちが空港での手続きや機内への搬送に奔走してくれて、無事搭乗。搭乗するまで中華航空の関係者とチョットしたトラブルがあったようでしたが、強引に押しきったようでした。医務官もモンゴルから北京まで付き添ってくれて、北京まで迎えに来てくれていた東京女子医大の緊急救命センターの鈴木センター長にこれまでの経過を説明してくれました。検査の数字を見ながら、「危ない数字だ」「体力が持たないのでは...」などの会話がかすかに聞き取ることができました。北京の日本大使館スタッフも空港に待ち構えており、一切の手続きを矢継ぎ早に済ませてくれました。全日空のファーストクラスの席を潰し、そのまま寝たままの状態で運ばれました。何度も何度も降りた成田空港でしたが、今回だけは飛行機から空港の灯りが見えた途端、胸にせまるものがありました。どしゃ降りの成田空港に着いたのは午後8時定刻。ファーストクラス脇の扉を開けた途端、機体の下には救急車が赤色灯を点けたまま待ち構えており、そのまま家族も搭乗して新宿の東京女子医大へ。その間、国際交流サービス職員の方が帰国手続きやらを処理してくれていました。救急車で携帯電話を持った鈴木センター長が、刻一刻と女子医大に容態を連絡している声が今でも耳

に残っています。救急車の中ではベットに寝たまま、家族の顔ばかりを見ていたように思います。東京女子医大に着いたときにも雨はまだどしゃ降り状態で、救急車から降ろされて隣を見ると職場の先輩がずっと到着するのを心配して待っていました。ただ驚いて一言二言何か話したように思いますが、今では何を話したのか一切覚えていません。そのまま緊急治療室ICUに直行、面会は家族一人だけという制限で妻が短い時間だけ面会したようです。ICUのベットに横になった時点から記憶がなく、ぐっすり寝込んでしまいました。

こんなこともあり、少し動けるよう体力が回復したら、妻の実家のある青森県八戸市の病院に転院しました。東京から青森まで直接向かうだけの体力もなく、一度は宮城県石巻市の実家に立ち寄って休みながら青森まで戻りました。ウランバトルから北京、北京から東京、そして東京から青森というように、たった一人の人間を日本に緊急輸送するだけで、いったい何人の人たちが関わってくれたのでしょうか。寝ている状態で運ばれたので自分自身では気が付きませんでした。妻から事の顛末を聞いてただただ感謝するばかりです。

## ふたたびモンゴルへ

長男はこの機会を利用して初めて日本の小学校に通うことになりました。小学校入学直前にモンゴルへ赴任したこともあり、学校のシステムが分かりません。朝礼で転校の挨拶をしると言われても、「朝礼」そのものがどういうものなのかさっぱり分かりません。天真爛漫だけが取得で乗りきった短い学校生活でした。次男は近所のスーパーに連れていっては大騒ぎ。物不足のモンゴルとは大違い、お金さえ出せば何でも揃うという状態を見て不思議ではない様子です。店頭においてあるリンゴをかじっては元の場所に置いてみたり悪戯盛りでした。

約3ヶ月間の療養生活を終え、一旦モンゴルへ戻ることにしました。完治したわけではないのですが、着の身着のまま緊急輸送されたこともあり、家族一緒にまた戻ることにしました。モンゴルへの赴任当初から、モンゴル大使館の次はシカゴ総領事館への転勤も決定していたのですが、この体調のままで転勤は本当に大丈夫なのだろうかという不安はありました。担当する仕事は変わらないのですが、新しい赴任地への引越に伴う体力、新しい人間関係、子供たちへの教育など、よく考えてみるのですが大変さは今以上だろうということは理解できました。妻はシカゴへの赴任を当初から楽しみにしていたことを考えると、アメリカに連れていきたい気持も多少はありましたが……。シカゴでは前任者の宿舍をそのまま引き継いでもらう約束になっていました。写真で見ると、ミシガン湖に面した20数階建ての高層アパートで、西側に沈む夕景のきれいな部屋でした。家族4人で生活するにはやや狭いように話していましたが、2年の在勤には何ら支障はないとのことでした。高層アパートからミシガン湖の砂浜まで僅か100メートルという環境にあり、大都会でありながらも自然が大事に保護されているといった感じでした。結局、妻と相談した末にモンゴル在勤2年を3年に延長してもらい、シカゴへの転勤は取りやめることにしました。

いずれにしてもモンゴルでの生活が2年から3年になったことで、気持もすーっと吹っ切れた感じです。それまでは、このまま帰国して退職すべきか、シカゴ転勤か、それともモンゴル在勤延長というなかで気持が大きく揺れていました。一番喜んでくれたのは大使館の現地スタッフだったかも知れません。

しかし体調のことを考えると、モンゴルの在勤を終えたら、すぐに外務省を退職し妻の実家がある青森県に帰ることにしました。そして、その後のことは何も考えず取りあえず治療に専念し、再就職のことは恩師や学生時代の友人たちと相談して決めようかと考えていました。

### 3ヶ月だけのマイホーム暮らし、 八戸から但東へ

青森県もとんでもない田舎だと言われていますが、その太平洋側の片田舎から、日本海側の片田舎に移住してしまいました。それも東北と関西とでは、環境も違えば言葉も大きく違います。まして、東京より西に暮らしたことの無い人間にとって、関西に住むということは一種の抵抗に似たものがありました。

定年になったら妻の実家がある青森県八戸市で暮らしたいと常々考えていました。たまたまモンゴル勤務中に体調を崩して、一時帰国して八戸市内の病院で療養を続けていた関係もあり、思いきって八戸市に落ち着こうかと妻と相談し、住む家を先に建てることにしました。敷地内に私設博物館を建てたいという関係もあり、少しでも広くて安い物件がほしかったので、百石町の洋光台ニュータウンに決めました。購入した土地の西側には大きな公園が広がっており、子どもたちを育てるにはいい環境でした。

その後、何度か青森のほうに但東町の当時の町長や収入役・町関係者が足を運んでくれたり、家族で但東町を訪れたりというように、しばらく交流が続いておりました。百石町の我が家も着実に建設が進んでおり、12月になって家族全員で居候していた家内の実家から百石町の新居に移りました。

この時点で、但東町に来ないかという相談を受けており、夫婦喧嘩をしながらも妻と相談しながらも悩み続けておりました。最後は妻の「後で後悔するぐらいなら、あなたの好きなようにしてもいいよ」という一言で但東町に移る決意をしました。それでも不安は強く残っておりましたが、帰る家も新築したばかりなので、いざとなったらまた青森で出直してもいいや、そんな感じでした。新築した我が家には僅か3ヶ月だけ住んだだけで、管理は住宅会社に勤務している同級生に託しました。

妻と結婚して、これまでに13回引越しを経験

しました。好きで引越しているわけではなく、サラリーマンである以上は転勤やそれに伴う引越しが付いて回るものですが、さすがに13回は疲れました。現在の但東町で最後になるかどうかはまだ分かりませんが、今までと違って少しは長くなるような予感を感じています。

### 正確なモンゴル文化を紹介したい

モンゴルに赴任するまではモンゴルの本当の姿を理解していませんでした。遊牧という言葉のように自由気ままに草原で暮らしていると思っていましたが、彼らの生活を知れば知るほど、厳しい自然環境を最大限に活用しながら、最も大切にしてきた民族であることを教えられました。彼らの生活や考え方は、まさしく地球に最も優しいものであると同時に、地球時代と叫ばれている現代こそ、彼ら遊牧の民から学ぶべきものがあるようにも感じました。生活に必要な無いものは持たず、シンプルな暮らしの中にも、高度な牧畜文化を培ってきた歴史は、21世紀を迎えた私たちに必ずや生きるヒントを与えてくれるだろうと確信しています。そのためにも、きちんとした正確なモンゴル文化を紹介したいという思いに駆られています。厳しい生活環境にありながら、モンゴルの人たちは私たち家族のために公私を問わず、あらゆる面で支えてくれました。モンゴル人がおかれている自然や生活環境の厳しさは日本の比ではありません。1年を通じて、常に自然災害にさらされながら、なおかつ自然に依って生きていかなければなりません。寄り添い助け合うことは、奇麗事でも何でもなく、生きぬいていくための必要不可欠の条件なのです。今日助けられることが、明日助けることに否応無くつながっている生活では、「言う」ことよりも「やる」ことのほうが先決問題となります。また、在勤中に体調を崩し、モンゴルから緊急輸送をされて東京女子医大のICUに入院したときにも、モンゴルの多くの人

たちの手を煩わせてしまいました。誰もがモンゴルに戻って来ないと信じていただけに、再開できたときの喜びは言葉になりません。今までお世話になったモンゴルの人たちが集まり、モンゴルに戻れたお祝いに、「お前の夢に協力しよう」と言われました。在勤中の3年間で5千点以上のモンゴル民族資料を収集できたのは、彼らの協力や信頼関係があったからこそです。

これからは思考だけではなく、行動においても田舎がグローバルであってもいいはずですが。都会にはりっぱな博物館や美術館が溢れているのに、田舎にだって郷土に縛られない世界に開かれた施設があってもいいではないですか。田舎でも頑張ればやればいいものができるかと確信しています。大学を卒業して博物館の仕事をしたと考えていましたが、思うように希望がかなえられず、挫折してしまいました。結婚して子どもが生まれ、趣味の世界として続けてきましたが、素人でも長く続けることによって本物になることを最近強く感じました。

### もっと地方に誇りと自信を

全国的に文化施設が充実してきましたが、近年は地域的な偏りも生じ、またあまり利用されないという事態もかなり見られるようになりました。文化行政が叫ばれて久しくなりますが、経済水準の高まりに比べて全国的な町づくりはさほど進展していないのではないのでしょうか。それは多様な文化を作り出していくだけの活気ある社会が維持されていないところに問題があるように思われます。このような社会であるからこそ、「文化」で結びつく仕掛けが必要になると思います。この仕掛けを持たない地域は、いずれ人々が寄りつかなくなってしまうでしょう。地域がそういう仕掛けをふんだんに有し、人々の多種多様な活動の積み重ねが行なわれ、地域振興に結びついていくことを期待しています。

また、住民側においてはもっと地方に誇りと

自信を持つべきです。地方の活性化とか地方の時代などと叫ばれていますが、現在の地方は魅力も力も失って、ますます東京への一極集中化が進むばかりのような気がします。地方で多くの人たちが東京に憧れているような現状では、地方の活性化などできるものではありません。地方に居ながらにして東京と同じ情報を、もしくはそれ以上に享受してほしいと思います。昔から、異なる文化の触れ合いが新しい文化の息吹を生み出してきました。そういうことから、何かを契機として市民が地方に誇りと自信を持つきっかけになればと思います。関係者には他者理解が実は自己理解だという「文化の正道」を歩んでくれることを望み、将来を担う子供たちには塾通いなどやめて、美術館や博物館に行してほしいものです。

文化行政で大切なことは、一律的な事業を展開し、文化の質を高めていくことも必要ですが、他とは異なった独特の個性ある文化行政を進めていくことも忘れてはなりません。全国の市町村で博物館が相次いで作られ、現在も新しいものが作り出されていますが、郷土の歴史や民俗を紹介したり、郷土を総合的に理解させていくには十分な施設かも知れませんが、これだけでは地域の住民が何度も訪れてはくれません。そこで何をやろうとしているのか長期的な展望がないと、後々の博物館運営に不都合が生じてしまいます。

### これからの地域博物館に求められるもの

これからの地域博物館に求められていくものは、郷土だけに縛られるのではなく、世界・日本・郷土という三つの視点を基本に思考していくべきだと考えています。いわゆる理想の拠点作りです。町の博物館構想は「小さな世界だけれども、そこには大きな世界が存在する」という新しい博物館を模索しています。町が従来在市町村レベルの博物館というイメージに固執す

るのではなく、博物学的重要性とともに、必要とされる博物館のイメージをはっきりと打ち出すべきと考えています。まず、特色のある博物館というものがどのようなものなのか議論を尽くすべきです。そして、本当におもしろい特色のある博物館作りを進めていきたいと願っています。重要なことは、どういう楽しいものを作るかであり、ニーズのないところに刺激を与えたり、ニーズを開発していくという考え方が必要なのです。文化行政においても、量から質への転換が迫られており、地域に相応しく質の良いものであれば、文化事業としても期待されるはずで、現代においては人々は知的関心や楽しさを求めて、昔よりもはるかに大勢の人たちが、はるか遠くまで、はるかに頻繁に、博物館や美術館に足を運ぶようになってきました。また、地域の学習の場として、博物館が積極的に活用されるよう、情報交換や地域との連携・協力を一層進めていかなければなりません。

また、博物館作りの中には、その利用の仕方などを説明したPR活動が、どこの市町村においてもうまく機能していません。PR活動をきちんとやらないと、「売り物」にならないのです。博物館を作ったが人は入らない、では困ります。どうしたら人が入るのか真剣に考えなくてはなりません。人が来なければ、これは利用価値がないということで、やはり具合が悪いのです。最初の宣伝活動が大切であり、いいものであれば人が必ず来るといってもありません。きちんとしたセールスが必要になってきます。都市住民は過疎の実情も分からないで批判ばかりしています。その隙間を埋めるためには、双方が刺激し合う活動が必要になってきます。過疎からの情報を発信しながら、都市の情報をフィードバックしようとする試みが必要でしょう。都市部では、土地理解の手がかりになる風習や文化には、なかなかお目にかかることが少ないのですが、但東町には先人から受け継いでいる素晴らしい文化や風習が残されています。これらのものとモンゴルをテーマにした町

おこしはユニークだと思います。バブルがはじけ、これからの企業戦略は文化のあるものが生き残っていくという話が盛んに論じられています。地域も同じことであり、町の将来は町特有の文化の上にしか存在しないのです。

過疎と呼ばれる山里の取り組みに、地域の世界感覚を期待してほしいと思います。モンゴルや世界の人たちが相互理解や協力の関係を通して「共に生きる地球家族」を目指して、「Think Globally and Act Locally」というように、現在は地球的に考えて、地域的に行動すべき時代だと思います。お互いの努力が相乗効果をおこし、より深い文化理解、人間理解につながっていくことを期待しています。地方の小さな博物館においても、既成の概念や枠にとらわれない大胆な発想こそが今、切実に望まれています。そして博物館は地域住民に教育する場ではなく、地域住民が自分なりに感じ取る場だと思います。異文化と触れることによって、それまでと違った発想が生まれ、伝統を踏まえつつ新しい文化を創り出せるきっかけになるかも知れません。大阪や東京経由ではなく、過疎の小さな博物館から直接世界に向けて発信してい

きたいと考えています。

但馬に生まれた小さな博物館はまだその芽は小さく脆弱ですが、多くの町民やモンゴルの友人たちによって支えられてきました。今後、モンゴル博物館を全国の子供たちの国際理解の場にしたいと考えています。少しでも国際理解学習の拠点として身近に考える切り口になれば幸いです。



但馬に生まれた小さな国際交流の発信地  
「日本・モンゴル博物館」

## 一日が26時間、但東町の暮らし

転勤生活を繰り返し、まさか但東町に暮らそうとは思ってもみませんでした。但東での生活もアツとい間に過ぎてしまいました。「地方はのんびり」のはずの但東での生活がやたらと忙しいのです。着任してすぐにモンゴル博物館の建設を担当し、開館してからは慣れない運営や企画展に疲弊している毎日です。それでも通勤時間のことを考えれば、こちらは首都圏のサラリーマンに比べて往復2時間以上は得している勘定になります。つまり但東での一日が26時間あるということにもなります。職場と家との通勤だけで一日が終わってしまう都会の生活に比べ、但東での何とバラエティーに富んでいることが……。時間を使うのも、使われるのも、所詮は人間様次第でどうにでもなるものと思います。

確かに日常は博物館と家の往復だけなので、行動半径200メートルといったところです。それでも毎日眺めている山並は刻々と変化し、これまで気づかなかった草花や小さな虫たちの動きにも変化があって楽しいものを感じます。講演や出張も比較的多くありますし、新しい土地での交流や博物館を介しての交流なども多く、但東は決して情報や人の過疎地ではないと思います。家に帰ればインターネットを介してニューヨーク、コロンビア、ルーマニア等で頑張っている友人たちからのメールが届いています。週に何度かはモンゴルとの情報交換で国際電話やFax、E-mailでモンゴルとのやり取りもしています。山奥の田舎に暮らしながらも、意識は地域を越えて外国とつながっています。新しい働き方のスタイルは一人一人が作っていくべきだと思いますが、今の日本ではその可能性をも奪おうとしているように見えます。もっと地方を拠点としたライフスタイルの構築も考えてほしい、そんな気がしています。そして、人生における「ゆとりの費用」について今一度考えて

ほしいと思います。

21世紀は、田舎にこそ本物の文化が息づく時代だと考えています。本来、文化とは人間の喜怒哀楽といった感情の上に成り立つものだと思うのです。人々が自然と触れ合い、感動することによって文化は発展していくのではないのでしょうか。ところが最も肝心な自然との触れ合いが欠落しているために、感動することが少なくなり、悲しさや淋しさなどの感情が希薄になっているような気がします。憂いや悲しみといった感情は、テレビゲームや「たまごっち」「ロボット犬」の中では絶対に育まれることはないと思います。「たまごっち」というゲームなどは現代を象徴しているように思われてなりません。「たまごっち」が受けるのは生き物を簡単に飼っているという感覚だけだと思うのですが、現実と明らかに違うことは人間にしる動物にしる生きるものには責任を持たなければならぬということです。ゲームの上で面倒くさくなったらリセットしたら、それで責任がなくなります。しかし現実には生き物を飼育することは大変なことであり、責任が必ずや伴います。モンゴル草原で暮らしている子供たちと日本で暮らしている子供たちとの大きな違いは、子供であろうと社会を構成する一員だということです。それだけに遊牧民として家畜を飼う責任もあります。強く生きる力もまた兼ね備えています。

## 子供から始まった小さな国際交流

かつてモンゴルの日本大使館で一緒に働いていた現地職員の11才になるお嬢さんを但東町に呼びました。僅か3ヵ月間でしたが、地元の小学校にも通いました。町にやってきたプーチェは、元気で個性の強い子供でした。個性があっ

ていいのですが、男の子から自転車を取りかえして乗り回したり、「おならプーチェ」とからかわれて男の子を殴り返したりというように、

手のやくお転婆さんでした。我が家にホームステイする計画で調整しましたが、初めの二週間だけ大人しくホームステイしてくれましたが、女の子の友人ができると今度は同級生宅に泊り込んで帰ってこなくなりました。一日1回は着替えを取りに戻りましたが、あとは疾風のように消え去っていきます。モンゴルに住んでいるときは家族ぐるみのお付き合いをしていたので、プーチェの性格もよく知っていたつもりでしたが、まさかこんなに活発な子供だったとは知りませんでした。

プーチェが日本に抱いていたイメージは但東に来てから大いに変化していきました。関西空港に着いたときには、夢にまで見たあこがれの日本にやって来たという思いで喜びを体全体で表現していたことを今でも忘れられません。舞鶴自動車道を経由して福知山から但東への入口でもある登尾峠を越えたあたりから、プーチェの様子は何故かおかしいのです。下をうつむいたままだったので、長旅で疲れて具合が悪いのかと尋ねると、「ここは日本じゃない」とベソをかいておりました。プーチェが抱いていた日本のイメージは、東京であり、大阪や神戸の大都市だったのです。日本に但東のような小さな町があることをモンゴルの学校では教えてくれなかったそうです。あまりにも違う日本への思いに対するギャップに、プーチェの小さな心は耐え切れなかったのでしょうか。二、三日の間はこんな感じで大人しくしていましたが、本領を發揮したのはそれから間もなくの事です。周囲からも「わがままなモンゴルっ子プーチェ」などと呼ばれもしましたが、彼女が町に残した大きな土産がいま大きな花を咲かせようとしています。

同じクラスだった子供3人だけでプーチェに会いにいたり、担任だった先生までもがモンゴルに出掛けていきました。子供たちだけでモンゴルの情報を集め、国際電話でプーチェと打合せをし、モンゴルではプーチェの両親が休暇をとって受け入れ準備を進めていました。たっ

た6年生の子供3人だけで計画した旅行です。関西空港まで送って行きましたが、そのときの子供たちは「アジアの同級生に会ってくる」と元気な声で旅立っていきました。このときばかりは、国際交流の一つのあり方を子供たちに教えられました。親たちも予期していなかったことが、子供たちを中心としながら確実に変化してきたという感じです。山に囲まれた但東の子供たちから「アジアの同級生」と聞いたとき、意識だけは地域を越え、日本も越えてアジアに向かっていることを知りました。このときの驚きは、町が進めている国際交流の原点でもあります。今夏、中学生を中心にした但東モンゴル友好使節団が出発し、また新しい思いを抱いてモンゴル草原に降り立つことと思います。

### 但東町に住んでも遊牧民の仲間入り

モンゴルで暮らしているときに、遊牧民の友人バヤルトクトホから家族になった証として、生まれたばかりの子馬1頭と羊1頭を息子たちがプレゼントされました。あなたたち家族に差し上げたものだから、このまま連れて帰ろうが、煮て食べようが、好きなようにしなさいと告げられました。子供たちが馬や羊に名前を付けて、そのときはウランバートルの家に戻ってきました。また季節が移り、プレゼントされた家畜を見にいったら、家畜の群れからこれがあなたたちに差し上げた家畜だといって、大きくなった家畜を目の前まで連れてきました。そして、また連れて帰ろうが、食べようが好きなようにしなさいと告げられました。それ以来、遊牧民の友人バヤルトクトホには会わずに帰国してしまいました。

日本に帰国してからは日々の雑用や仕事に追われて、モンゴルでの出来事が少しずつ消えつつありました。そんな中で、帰国後2年半して、長男がモンゴルに出かけて遊牧民バヤルトクトホの家にも立ち寄る機会がありました。案の定、

息子を見るなりプレゼントしてくれた子馬を連れてきて、おまえの馬はこんなに大きくなっただろうと、そして羊は2頭に増えただろうと告げました。当時は日本に帰国したらもうモンゴルにはそういつも来れないだろうと思って、子馬や子羊をプレゼントしてくれたものと勘違いしておりました。今考えてみたら、何て恥ずかしいことを考えていたのだろうかと思います。いつ来るともしれない私たち家族を2年半も思いつつ、この家畜を大事に育ててくれたことを改めて知りました。息子からこの話を聞いた途端、何か熱いものを感じ、すぐにでも彼らの元に飛んで行きたい気持ちにかられました。バヤルトクトホからいただいた家畜はすでに馬2頭、羊6頭に増えているそうです。気分は但東町に住みながらも、あのモンゴル大草原の遊牧民として仲間入りしています。田舎に暮らしているから、田舎のことだけ考えていればいいという時代はすでに過ぎています。これからは田舎に暮らしながらも地球家族として世界を視ていくことが大切ではないかと思います。

### サラリーマンは 「田舎に転勤すると三度泣く」

サラリーマンの言葉に「田舎に転勤すると三度泣く」と言われるものがあります。一度は田舎に転勤になったことを嘆いて泣くこと、二度目は田舎の閉鎖性に泣くこと。そして三度目は人の温もりに泣くと言われます。私たち家族も、この但馬での生活を通してまさしく三度泣くことになってしまいました。

一度目は自分たちが選択して来た但東町でしたが、本当は青森県八戸市での生活を望んでいました。何が何だか分からないうちに話しがトントンと進んでしまい、少々戸惑いがありました。ある日突然、右も左も分からない環境に置かれてしまい、買物さえ困る毎日で途方にくれることもありましたが、思えば本当に遠くへ来てしまったというのが実感です。

二度目は博物館を建設するという事で、議会が紛糾したり、嫌がらせの電話をされたり、自分たちが望んでもいないことで叩かれることも多くありました。そして、何かある度に「どうせよそ者だから」という言葉が返ってきます。心無い言葉に心身ともに疲れてしまい、当時はとんでもない町に来てしまったというのが本音です。これが田舎の閉鎖性だということを知り、思った以上に固い結束で結ばれている集団であることも分かりました。無理をして「今日から私たちは、ここの町民です」などと言うつもりはありませんし、今後も積極的に「町民」と言うことはないでしょう。ただ、私たちの子供には、きっと「自分たちの故郷は但東です」と、胸をはって話すことを期待しています。

そして三度目は、周囲の温かさです。引越しの整理も落ち着き、しばらくして玄関の大きなクリスタルの花瓶にいつもきれいな生け花が飾ってあるのに気が付きました。何気なく、妻が生けていたのかと思っていたら、なんと隣の奥様であることを妻から聞かされました。よく見ると、花屋で買えない四季折々の草花や木が必ず何気なくさされています。おそらく、近所の里山を歩いて探して来られたことを考えると、熱いものがこみ上げてきます。野菜や米なども誰か分かりませんが、玄関先に置いていかれることも多く、知らず知らずのうちに地域の人たちにお世話になりながら生きていたことを知り、今では深く反省しています。嫌いだと思って暮らしていた但東町が、実はここから離れられないほどに人情味を感じ、人の温もりに泣く毎日です。田舎の良さなどは、簡単に分かろうとすると無理がありますが、黙っていてもいずれ必ず知ることになります。但東に来てから既に6年、生け花は今でも続けていただいております。

サラリーマンが田舎で三度泣くという背景には、田舎にはこれまで悪いイメージでばかり使われてきたように思います。都会は進んでいて田舎は遅れている、都会には良いものが沢山あ

るが田舎には魅力的なものがない、都会は便利で田舎は不便、常に都会の利点と対照なものとして「田舎」は語られてきたように思います。お互いの住む場所を比較して、少しでも都会であることを誇り、都会でありたいとの願望を抱いてきたように思うのです。でも、「三度目に泣く田舎」を知っている本当のサラリーマンはいったい全国にどれだけいるのでしょうか。

### 大人の遊び場「山猫軒」

これまで家族に迷惑をかけない大人の遊び場がほしいと勝手に計画しつつも、なかなか実現までには至りませんでした。そんなときに引越してから一度もマイカーを入れたことのないガレージが空いているのを思いだし、物置になっていたガレージ内を居酒屋風の空間に変えたいと取りかかりました。特別な手をかけてああだこうだと改造する気もありませんでしたが、それでも最低は看板とテーブルくらいは自前で揃えるべきだと妙にこだわってしまいました。看板はケヤキの一枚板で約20キロ以上もある代物。大人の遊びといってもやはり酒を飲むのであれば、洒落た名前の一つでも付けたいと思うのが真の「大人の遊び」なのです。山猫軒のシャッターを開けると、前方には標高400m程の、コ

ブを幾つか並べたような東里ヶ岳が見えています。宮沢賢治の作品に出てくる「七つ森」という雰囲気似ているのではないかと勝手に思っています。そこで、宮沢賢治の有名な作品「注文の多い料理店」から山猫軒の名前を借りることにしました。

店名が決まったら、今度は本格的な看板作りです。ケヤキは思った以上に硬くてうまく彫れません。仕事が終わった後に毎日ノミを持って挑戦していましたが、ノミと彫刻刀を何本もダメにしてみました。楽しみながらやっているとはいえ、なかなか思うように彫れないジレンマに苛立つこと3ヶ月あまり。ようやく彫り終わった看板を前にして、何か物足りなさを感じてしまうのです。表面にサンドペーパーをかけながら、思いきって「津軽塗り風」にしてしまえと思い、漆ペイントを購入して早速チャレンジ！でも所詮は素人の浅はかな思い付きだけで、できあがった作品は津軽塗りにはどうみても見えないものになってしまいました。苦し紛れに「鎌倉彫り風」などと嘯っています。

表の顔が出来上がった次は、店内の顔作りです。何といても10人は座れる大型テーブルに挑んで見ることにしました。材料は山猫軒から車で5分ほどにある山林に登って伐採してきた高さ10mほどのヒノキ4本です。近所の製材所の方に同行してもらいましたが、材木のきり出



苦心の作「鎌倉彫り風」看板



ヒノキ製の特注テーブル

し作業がこんなに重労働だとは知りませんでした。伐採したヒノキをふもとに下すだけでヒイヒイの連続。すぐに製材所で板材に挽いてもらい、約一月半かけて自然乾燥させました。何とか無事に3mほどの長机を作り上げたのですが、足元が少々ガタツクのが難点といえば難点。それでも手作りを信条としていることから、こんなものかと勝手に納得。その後、博物館と取引をしている会社をお願いして特注テーブルの製作を2基お願いしました。天板は杉の80年もの、脚は日高町神鍋産のブナ。女房に文句を言われながらも大人の遊びを信条にしている者としては、小遣い範囲での遊びは今回は無理なので、女房をお願いして何とか素直に決着。でも、少しでも楽しめる田舎スポットが一つでも増えればと願って運営しています。

### 相手のことを考えない援助は「援害」

パンテックユニオンのみなさんはモンゴルへの支援をされているということで、援助のことについて少しエピソードを紹介したいと思います。少し厳しいことも言いますが、これまでみなさんが取り組んできたことを否定するつもりはなく、新しい活動へ発展させるアドバイスとしてさまざまな失敗例を聞いて欲しいと思います。

国が行っている援助にODA（政府開発援助）というものがあります。モンゴルでは栄養不足から乳幼児の生存率が高くなかったため、ある時期このODAでモンゴルの子供たちに粉ミルクを送るというプロジェクトが行われました。ところが日本とモンゴル2国の政府が決めたにもかかわらず、ミルクは肝心の子供たちの手に渡らずに、どのようなルートで入手されたかは不明ですが、国営百貨店のショーケースに並んでいました。そして日本とモンゴルの国旗がラベルにプリントされたこの粉ミルクを、何も知らない日本人の観光客がお土産として買って帰

っていました。

またあるプロジェクトでは、一般のモンゴル人が使用できないようなモンゴル文字のワープロ（現在のモンゴル人は大部分がロシア文字を使用）が500台も送られ、数千万円もする高額医療機器も停電のために故障して使用できない状況に陥っています。

民間のボランティアも同様です。雪害で困るのは家畜が死んで生活ができないからです。それなのに日本からは大量の古着がモンゴルに送られてきます。確かに着るものが必要な人たちも大勢いますが、そのような人たちには古着が届いていないことも多くあるのです。

支援するという行為そのものは良いのですが、日本の援助は物やお金を送ってそれで終わりという物が目につきます。支援というものは確かにお金がかかりますが、かけたお金の絶対額ではなく相手にとってどれだけ価値のあることが最も大切です。そうでなければ、援助することによって反対に相手がダメになってしまう援助の害、まさに「援害」となってしまいます。そうならないためにも、支援する側の自己満足ではなく、相手の国や人々と手を取りあって取り組むことが必要であるということです。

また、支援活動とは直接関係ないのですが、タイ等の東南アジアでは労働者さえ口にするのができない肉や魚類が、日本に輸入されペットフードの原料になっているという実態もあります。これは正規の商取引ですから問題がないといえれば問題ないのですが、何か違和感を覚えます。日本はもっとアジアに目を向け、自分たちの利益だけではなく本当の意味でアジアの発展に力を尽くすべきだと思います。

### 「友達の多い人生は豊かな草原と同じ」

本日は私の歩んできた人生経験を中心に、モンゴルや但東町のこと、あるいは博物館や地方暮らしについて話をしました。日本は豊かな国

と言われ続け、これまでそれを疑うことなく信じてきました。それがここ数年の間に、銀行が潰れたり大合併したり、証券会社も潰れ、天下の財務省までもが震撼するという事態を誰が予想できたでしょうか。でも、内心では日本の豊かさは裏腹に、実は表面的な豊かさにすぎないことを誰もが感じており、砂上の楼閣のような脆さに支えられた贅沢が崩壊していく予感を、心中ひそかに感じていたのではないかと思います。

これから住みやすい環境を作るためにも、地域からの国際化を目指しながら、多様な文化を認め合いながら暮らしていくという生活が求められていくと思います。

最後にみなさんにモンゴルの一番の良さを紹介します。モンゴルの良さ、それは何も無い大自然と賢明な国民です。人々が大自然とともに生き、国の財産は「人」であるということです。モンゴルの人たちは欲望の少ない民族だと言われます。それは遊牧のためにいつも移動しなければならず、多くを持たないことを生活信条としているからだと言われています。モンゴルの友人から聞いた話ですが、「富を貯めるということは各個人のゲルにモノを貯めることではなく、大地を豊饒に、自然豊かにし、自然の中に富を貯めることです」と教えられたことがあり、今の私たちが真摯に耳を傾けなくてはならない言葉だと思います。自然を基盤として、それを損なうことなく、その上に生活の基盤を築いてこそ、個人としての豊かさも実現できるものなのです。どんなに贅沢な料理でも、食品の安全がなければ、逆に健康を損なうことと同じことです。

また、モンゴルに「友達の多い人生は豊かな草原と同じ」ということわざがあります。友達が多いということは、一番の財産をたくさん持っており、それだけ豊かな人生を送れるということだと思います。

本日は話した通り、私にも長い人生の中でさまざまな試練があり、そのたびに友人や上司、同

僚に助けられてきました。このセミナーに参加しているような若いみなさんには、広い世界にはさまざまな人たちがいることを見てほしいと思います。そして多くの交流を図り、特に職場以外で多くの友達という財産を作っていただきたいと思います。

本日は長い時間にわたってご静聴いただき有り難うございました。

以上

かなつ まさのぶ  
金津 匡伸プロフィール

経歴:

- 1958年 宮城県石巻市生まれ
- 1982年 八戸工業大学建築工学科卒業（建築歴史）
- 1982年 ナショナル住宅東北支社勤務、住宅設計・工務管理を担当
- 1985年 総合警備保障東北支社勤務、機械警備・都市銀行警備対策を担当
- 1991年 外務省入省、在モンゴル日本大使館勤務
- 1994年 外務省退職、「但馬の祭典」で森と砂漠を結ぶ国際シンポジウムに  
モンゴル民族資料500点を初公開
- 1995年 但東町教育委員会生涯学習課係長として青森八戸市から赴任  
博物館建設・文化財・国際交流を担当
- 1996年 日本・モンゴル民族博物館開館に伴い副館長
- 2001年 機構改革に伴い館長、現在に至る